

「乍浦・沈莊の役」再考

— 中国国家博物館所蔵『抗倭図巻』の虚実にせまる

山 崎 岳

一、『倭寇図巻』を解く鍵

史料編纂所が所蔵する『倭寇図巻』が戦前から国内外に広く知られていたのに対して、中国国家博物館所蔵の『抗倭図巻』が日本国内で認知されるようになったのは、つい五年ほど前のこととされる。⁽¹⁾この図巻の「発見」によって、これまで事実上天下の孤本とみなされてきた『倭寇図巻』を比較対照する可能性が生じ、その系譜関係がにわかには注目を集めることとなった。

さらに『抗倭図巻』の由来を探る重要な手がかりが、昨年のシンポジウムで台湾・清華大学の馬雅貞氏によって報告された。⁽²⁾清代中期の文人・張鑑が、その師・阮元が所蔵する一幅の画巻について記した「文徵明画平倭図記」（以下「平倭図記」と略称）である。この「平倭図記」に記述される人物描写は、現在北京国家博物館に所蔵される『抗倭図巻』の描写とおおむね符合しており、『抗倭図巻』とはほぼ同内容の『図巻』がかつて阮元に所有されていたことが明らかとなった。ここでは、これを阮氏本『平倭図巻』と呼んでおこう。この阮氏本『平倭図巻』と国博本『抗倭図巻』とは、どちらかが他方を直接あるいは間接に模写したのか、あるいは原本を同じくする模写という関係にあることになる。

張鑑の記述によれば、阮氏本『平倭図巻』には、能筆で知られた明代の文人・張寰の手になる題跋が附され、その記事所載の年月から、ここに描かれた光景は、嘉靖三十五年（一五五六）陰曆八月に行われた「乍浦・

沈莊の戦役」を描いたものだとい⁽³⁾。詳細については、すでに活字になっている拙稿を参照していただければよいので省略するが、現時点でほぼゆるぎない事実と見なせるのは、現存する国博本『抗倭図巻』と非常に近い関係にあると思われる阮氏本『平倭図巻』が、嘉慶一〇年（一八〇五）七月に張鑑が阮元から鑑定を依頼された時点において、張鑑が述べるような状態で存在していた、というただ一点である。ただ、さらに一歩進んで言うならば、その時点ですでに附せられていた題跋によって、それは胡宗憲の乍浦、および沈家荘における戦勝を記念するものとは必然的に性格づけられるべく伝世していたのである。

二〇一二年の十一月、筆者は史料編纂所の共同研究の一環として行われた乍浦、および沈家荘への調査に同行し、『抗倭図巻』の題材となつたと考えられる戦役の舞台を、実際にこの足で踏査する機会に恵まれた。今回は「乍浦・沈莊の役」という事件のいきさつを紹介しながら現地調査の報告を行うとともに、国博本『抗倭図巻』をこの戦役にみわたることが果たして妥当かについても触れたいと思う。

二、江南の「倭寇」

この事件の舞台となる乍浦・沈家荘は、いずれも江南デルタと呼ばれる長江河口部の三角洲の南辺に位置する。現在の上海市から江蘇省南部、浙江省北部にかけて広がる江南デルタは、現在でも中国を代表する経済的な先進地だが、明代には紡績・織布を主産業とする大小の市鎮が

叢生し、その中心都市であった蘇州は、当時の文人文化の中心都市としても知られていた。⁵⁾

ところが、嘉靖三十二年（一五五三）正月以来三年半の間、江南デルタを「倭寇」と呼ばれた集団が襲撃し、明朝の文化的・経済的な中心地であったこの地域は大きな混乱に陥った。この時の「倭寇」は、三沙・柘林・川沙窪・陶宅、そして乍浦など海に面したデルタ辺縁の中小の市鎮を相次いで占拠し、戦局に随って転々と拠点を移しながらも、官軍と一進一退の形勢を維持し続けた。これが世にいう嘉靖倭寇である。

北京から遠く離れた一地方の動乱とはいえ、「倭寇」は明朝中央でも大きな問題としてとりあげられた。元末の方国珍・張士誠の反乱さながら、こうした形勢を放置しておけば、明朝の南方支配の中核であり、第二の首都であった南京が脅かされ、さらに南方から大運河を通じて運ばれる富に多くを依存していた明朝政権にとって、その存立の危機にもつながりかねない事態である。肥沃な農業地帯であり先進的な手工業生産地であった江南デルタは、明朝にとって経済的な心臓部であり、また少なからぬ政府高官の出身地でもあった。

このころ官憲から「倭寇」の首領と目されていたのは王直という人物である。⁶⁾ただし、日本における王直の影響力は実際以上に誇張されたものであり、江南の「倭寇」が王直の統属下にあったわけではない。「倭寇」とは一枚岩の集団ではなく、いわば中小の集団が利害関係に随って離合集散を繰り返すゆるやかな連合である。それぞれの集団は一定の独立性を保持し、しばしばそれが集団間の抗争にも発展しかねない危うい関係にあった。

最終的に江南の「倭寇」の頂点に立ち、これを率いていたのは徐海という人物である。⁷⁾『籌海図編』によれば、徐海とその傘下にあった陳東・麻葉らが率いた日本人の出身地は、薩摩・肥前・肥後・筑前・豊後・博

多・対馬・紀伊・和泉・摂津などが挙げられる。⁸⁾ただし、彼らの経歴をみるかぎり、とりわけ薩摩や大隅など南九州の日本人と関係が深かったことが知られている。嘉靖『寧波府志』によれば、徐海はもともと杭州の虎跑山の僧であったが、叔父の徐銓の借金のかたとして大隅に送られ、徐銓が数万両の負債を遺して死んだので、これを贖うために掠奪を行うようになったとされる。⁹⁾王直と鉄砲伝来の文脈で知られる種子島は、徐海が嘉靖三十一年・三十三年・三十五年（一五五二・五四・五六）の三度にわたってこの島の住民を大規模に「倭寇」へと動員したため、島の人口が激減したとの記述も『日本一鑑』¹⁰⁾に見える。僧形の徐海は明山和尚との通り名で日本人の尊敬を集めていたが、集団内部で徐海に次ぐ地位にあった陳東は、「薩摩王の弟の故帳下の書記の酋」と呼ばれ、日本人たちの間ではいつそう大きな威信を布いていた。また、徐海麾下の日本人の将であった辛五郎という人物は大隅島主の弟と称していた。このほかにも徐海にゆかりのある日本人として、『日本一鑑』には種子島の助才門もしくは助五郎、薩摩の掃部、日向の彦太郎、和泉の細屋などの名が伝わっている。¹¹⁾これより数年を遡るころ、宣教師ザビエルがマラッカで出会ったという日本人アンジロー（ヤジロウ）も薩摩の人である。

また、宣教師フロイスも中国や朝鮮を掠奪する「ばはん」行為を薩摩の習慣であると述べている。¹²⁾この時代の南九州の武力に恃んだ海外進出への気運は、半世紀後の琉球侵攻の前提となったもので、「倭寇」の倭寇たる所以であったともいえる。

ただし、日本側の事情のみ語っていても、「倭寇」を理解したことはならない。王直や徐海のように史上に名を知られた人物をはじめとして、福建・浙江などの沿海諸省から有名無名の多くの人々が「倭寇」と呼ばれる反政府集団に身を投じた。その背景には明朝当局による海外貿易への統制、いわゆる海禁政策があったことは今日ではよく知られてい

(13) たしかに、当時の中国における日本銀の需要を考えても、また、「倭寇」の指導層が、この当時江南一帯で豪商として知られた徽州人や、勇敢な船乗りであった閩南人から構成されていた事実からしても、「倭寇」と海外貿易との関わりは非常に深いものとみてよい。一方、「倭寇」が三年ものあいだ江南デルタを占拠しつづけた要因として、江南の農村には、一六世紀はじめごろから貧富の格差に由来する紛争の火種が存在していたことを踏まえておく必要がある。急速に進展する商業化の波に乗り遅れた人々は、大土地所有や各種免税特権に基づいてますます豊かになってゆく富裕層に対して、強い不公平感を抱いていた。こうした不満が「倭寇」の勢いを借りて、官軍への対抗勢力を生みだし、政治都市を拠点とする官軍と市鎮や農村部を占拠する「倭寇」という対立の構図を形成した。その結果、「倭寇」は単に外国勢力による掠奪といった外在の現象にとどまらない、江南市鎮の独立運動ともいえるべき様相を呈していたのである。(14)

三、乍浦・沈荘の役

今回の問題となる「乍浦・沈荘の役」は、江南地方の人々にとって、「倭寇」の終息を意味する記念碑的な戦役であった。都市に逃げ込んで急場しのぎの城壁に立て籠もり、官軍による秩序回復を心待ちにしていた大多数の士大夫にとっては喜ぶべき事件であったに違いない。浙江・直隸総督軍務・胡宗憲の司令下に、「倭寇」の元締めとされた徐海の一派は相次いで逮捕・殺害され、江南デルタ本土で行われていた官軍と「倭寇」との間の戦闘はおおむね鎮静化した。この翌年、舟山島に駐留していた王直が官軍に帰順するのに前後して、江南・浙江一帯における「倭寇」はほぼ完全に平定されることになる。(15)

嘉靖三五年（一五五六）に行われたこの戦役の顛末は、茅坤『紀剿徐

海本末』や采九德『倭変事略』などに詳細な記述がある。ここではそれをもとに一連の経緯を紹介しておきたい。

まずこの前年に、胡宗憲は平戸の王直に使者・蔣洲を派遣して帰順を促し、その義子・毛烈が半ば偵察、半ば人質として、すでに官軍側に身柄を移していた。胡宗憲は『事略』によれば、陰曆五月二十六日、この毛烈の配下の者を使者として徐海の陣営に送り込み、彼らに官軍への帰順を勧める。徐海は王直もすでに帰順を決めたという使者の言葉を信じ、官軍への協力を約束する。ところが、この方針をめぐる徐海と部下の陳東・麻葉との間に反目が生じる。『本末』によれば、使者は一方で、陳東や麻葉が徐海に無断で帰順をはかっていると告げ、徐海の猜疑をおおたという。その後、官軍と徐海の陣営との間では何度か使者が取り交わされ、表面上関係は緊張緩和に向かった。陳東と麻葉は日本への帰国を望み、一党は六月二五日に乍浦に集結した。ところが、『事略』によれば、七月三日に麻葉が官軍に身柄を拘束される。さらに胡宗憲は捕えた麻葉に命じ、陳東に宛てて、徐海を殺して官軍に帰順するよう勧める手紙を書かせ、その内容を徐海に漏洩して両者の対立を激化させる。その結果、七月一四日には、陳東もまた官軍に身柄を引き渡される。徐海は七月二七日の夕刻に直属の手兵を率いて乍浦を去り、梁荘に移った。七月二九日、徐海は帰航を望む倭人を海上の船へと送り出したが、乍浦城内から出撃した官軍がこれに総攻撃を加え、陳東・麻葉の部下であった倭人の多くが殲滅された。これがいわゆる乍浦の勝利である。徐海は、投降の証しを立てるため、八月一日に平湖県城に入城し、胡宗憲はこれを手厚くもてなした。帰順した徐海の一派には、適当な居留地を与えられることとなり、徐海は八月八日に沈家荘に入居した。沈家荘は河を境界として東西に分かれており、徐海は東荘に、かつての陳東と麻葉の残党が西荘に居住することとなった。ところが、官軍の警戒がいっ

こうに解かれぬことで、徐海は自分が追いつめられたことを悟り、八月一七日には胡宗憲の使者を斬つて捨てて最後の戦に備え、愛妾二人を落ち延びさせようとする。一方、陳東や麻葉の部下たちは徐海を恨んでおり、また官軍に捕えられたはずの陳東から、徐海が胡宗憲の意を受けて彼らを滅ぼそうとしているという情報が流されていた。彼らは、逃げようとする徐海の愛妾らをとらえ、徐海のもとに押しかけて、これを罵倒し、乱闘に及ぶこととなった。八月二五日のことである。徐海はこの時に殺害されたともいわれる。また、その翌日、沈家荘に向けて官軍の総攻撃が行われ、徐海はこの日に河に身を投げたとも、燃えさかる沈家荘を枕に討ち死にしたともされる。この時の官軍の総攻撃が、江南の「倭寇」の最期ともいふべき沈家荘の役である。¹⁶⁾

四、現地調査から得たもの

前回の史料編纂所の調査旅行では、まず乍浦で光緒年間に作られた砲台が残る天妃宮砲台の埠頭を調査した。埠頭は北側には湯山、湾を隔てて東側には灯火山を望む。天妃宮は明代天啓年間の地方志にも存在が確認され、¹⁷⁾あるいは嘉靖年間に閩南系の「倭寇」によってもたらされた可能性も否定できない。埠頭には数隻の漁船とおぼしき船が係留されていたが、干潮のため港内には広大な干潟が現れていた。満潮時にはここに海水が満ちて、船の航行が可能になるはずである。嘉靖三五年に徐海・陳東・麻葉らの率いる「倭寇」が駐留したのは乍浦城南の官廠とされるが、¹⁸⁾このあたりから濱海路までの丘陵地帯は、周辺の平野を見下ろす位置にあり、布陣には最適の地と見える。湯山および灯火山はさしずめ緊急時避難用の山城であろう。嘉靖三五年七月に徐海が梁荘に移った際、陳東や麻葉らの部下は日本への帰航を望んで乍浦にとどまった。官軍側は徐海と密約を結び、官船数隻を乍浦の沖合に用意し、船をおとりに陳

東・麻葉の残党を海上におびき出した。「倭賊」、とくに日本列島出身者がこのあたりの山地に立て籠もって抵抗することを防ぐための措置ではなかっただろうか。乍浦城内から出撃した官軍は、沖合に繫留されたおとりの船を追う倭人たちを追撃し、多くの捕虜・首級を挙げ、多数が溺れ死んだとされる。彼らはこの干潟に足を取られて官軍の手にかかったであろう。

沈家荘という地名は現在残っていないが、平湖市林埭鎮青溪橋附近と同意されている(地図1)。¹⁹⁾ 一帯は水田で、ところどころに大小のクリークがはしっている。明代の建造とされる石橋は、道路の南側数十メートルの地点に架かっている。東側には記念碑が建ち、抗倭史跡との説明。周辺での聞き取り情報を総合すると、橋のかかる幅一〇mほどの水路から西側は住民の大半が沈姓で、宗家は現在乍浦鎮に移転したが、一族が少なからず同地に居住するようである。村内にはもと多くの建物が建っていたが日中戦争時に日本軍の爆撃に遭ったとのこと。乾隆平湖県志の地図でも沈氏の墳墓が橋の西側に点在していることから、徐海終焉の地である沈家荘はこの橋の西側一帯、水路で囲まれやや左まわりに傾いた南北約六〇〇m・東西約一〇〇mの長方形の空間を指すものと思われる(地図2)。当時の沈家荘は、壮大華麗な堂宇が建ちならび、堅固な外壁がめぐらされ、²⁰⁾四隅には望楼を備えており、遠くの様子をうかがうことができたという。また、沈家荘の建物は中間に河をはさんで境界とし、東西に分かれていた。衛星写真でも、この長方形が中間で屈曲しながら西北から東南方向に走る水路によって二分されるのが確認できる。これこそが茅坤の「紀薊徐海本末」にいう東荘と西荘を分ける境界の水濠であろう。

五、解けない謎

以上、歴史記述のなかの乍浦および沈荘の姿を、実地調査で知りえたかぎりでの現状に照らして明らかにしてきた。それでは、この共同研究の当初の目的どおり、こうした結果を各種『図巻』に照らしてみると、何がわかるだろうか。

はじめに述べたとおり、現在のところ国博本『抗倭図巻』の情景描写にもっとも符合する張鑑の記述によるかぎり、阮氏本『平倭図巻』、および国博本『抗倭図巻』は、この戦役を題材として描かれたものということになる。しかし、張鑑の人物比定は、いずれも確たる根拠によるわけではない一種のみたてに過ぎない。

『抗倭図巻』が胡宗憲の「乍浦、および沈家荘の勝利」を忠実に描いたものとするには、いくつかの疑問点があげられる。まずは赤外線照射で明らかになった「弘治三年」（一五五七）の年号が記されていること、これは同戦役が嘉靖三五年（一五五六）に行われたことを考えると明らか²²に齟齬をきたす。また、胡宗憲の幕下にいれば当然見知っていたであろう仏郎機砲の描き方に明らか²³な誤解が見られることも、この画の出自に疑問を抱かせる点である。

さらに不可解なのは、この図中には賊軍の大將である徐海の像が見えないことである。『明実録』や『倭変事略』に載せられる胡宗憲の戦勝報告によれば、徐海は八月二六日、官軍の総攻撃によって沈家荘の陣中で殺害されたとするが、これは官軍の戦功を強調するもので、疑ってかからねばならない。『倭変事略』本文は、徐海は前日の八月二五日に恨みをもつ者によって攻め殺されたとし、茅坤の『紀剿徐海本末』では、徐海は陳東の一派に襲われて刀傷を受け、翌日官軍の総攻撃にあつて河に投じて死んだと記される²⁴。また、徐海の首については、永順・保靖の

兵が徐海の愛妾の手引きで河をさらい、死体から首を斬って持ち帰ったことになっている。『明実録』の記述よりも、この方がむしろ説得力がある。つまり、おそらく徐海は、『倭変事略』が記すように、官軍の総攻撃に一日先だつてもと陳東の配下の者どもの手にかかつてすでに殺されていたのであろう。そしてその首は、徐海の愛妾たちに案内された兵士たちが、どぶからさらいだした死体から斬りとつたものだったと思われる。

張鑑は阮氏本『平倭図巻』に、小舟に乗った二人の若い女を見いだし、これを徐海の二人の愛妾、王翠翹と王緑珠と推測し、これを徐海の死を示唆するものと理解したようである。国博本『抗倭図巻』をみると、確かにそのそばに兵士の一団が立っている。ただ、彼らの動作はこれが徐海の首をさらう場面であるという決定的な要件に欠けており、軍旗に記される文字「威武神捷天兵」も必ずしも永順・保靖の土兵を示唆するものではない。

このほか、国博本『抗倭図巻』には、乍浦の沖合に浮かべられたおとりの船にむらがる倭人や、望楼をもつた沈家荘の屋敷を官軍が包囲するありさまなど、それらの戦役を特徴付ける光景の描写に欠けている。これらは、もし作者が特定の事件を題材にとつたとするならば、当然描かれてしかるべきモチーフではないか。

今回は、文献によって「乍浦・沈荘の役」の経過を確認するともに、現地調査によって戦役の地理的状况を検証し、さらにこれを『抗倭図巻』の描写と比較対照する作業を試みた。結果として、『抗倭図巻』の画面と具体的史実との間には明確な関連性に乏しいことを、あらためて確認することができた。画面上に描かれる人物の比定をかくも詳細に行つた張鑑の情熱は嘉みすべきかとは思いますが、あえて根本に立ち返つていうならば、その比定に何ら決定的な根拠はないのである。もちろん『抗倭図

巻」、あるいは阮元が所蔵した『平倭図巻』が、胡宗憲の戦功を記念するために描かれたものである可能性は十分にあるが、画面に展開する光景自体は画家の自由な構成によつたものである。これらの『図巻』が「乍浦・沈荘の役」を描いたものだという張鑑の結論は、疑つてかからねばならない。現時点では、『抗倭図巻』を特定の歴史的事件を忠実に描写する記録画として見るべき根拠は存在せず、描かれる光景は画家の絵画的想像力が生み出したものと見るのが妥当であると筆者は考へる。

〔註〕

- (1) これまでの『倭寇図巻』および『抗倭図巻』の研究については、須田牧子『倭寇図巻』再考（『東京大学史料編纂所研究紀要』二二、二〇一〇）の研究史整理を参照。
- (2) このシンポジウムは「倭寇図巻と抗倭図巻をめぐる新視角—美術史の立場から—」と題され、東京大学史料編纂所の主催で二〇一二年一月一〇に開かれたものである。馬雅貞「戦勲と宦蹟—明代の戦争図像と官員の視覚文化—」を含む会議の成果は、『東京大学史料編纂所研究紀要』二二、二〇一〇に収められている。なお、馬氏の同論文は、「戦勲與宦蹟・明代戦争相關圖像與官員視覚文化」（『明代研究』一七、二〇一〇）が初出である。
- (3) 張鑑の原文は誤つて「丙辰乍浦・梁莊之捷」とする。ここでは歴史的事実に基づいて「梁莊」を「沈莊」と改めた。
- (4) 張鑑の「文徵明平倭図記」の内容と背景の詳細については、前掲註(2)の会議の成果報告に附載された、山崎岳「張鑑『文徵明画平倭図記』の基礎的考証および訳注—中国国家博物館所蔵『抗倭図巻』にみる胡宗憲と徐海?—」（『東京大学史料編纂所研究紀要』二二、二〇一〇）の分析を参照。
- (5) 明代江南の社会および文化界の概要を知るための最新の入門書として、中砂明德『江南—中国文雅の源流—』（講談社選書メチエ、二〇〇二）が

挙げられる。

- (6) 王直の事蹟および評価に触れる研究は少なくないが、山崎岳「舶主王直功罪考（前編）—『海寇議』とその周邊—」（『東方学報』八五、二〇一〇）が従来の研究とは一線を画する見解を提示する。
- (7) 徐海とその集団の活動に関する専論に、李猷璋「嘉靖海寇徐海行蹟考」（『石田博士頌寿記念東洋史論叢』石田博士古希記念事業会、一九六五）がある。
- (8) 鄭若曾『籌海圖編』巻二／倭國事略。
- (9) 嘉靖「寧波府志」巻二／海防書二「先是、徐惟學以其姪海即明山和尚、質於大隅州夷、貸銀使用。惟學至廣東南畧、為守備指揮黑孟陽所殺。後夷索故所貸於海、令取償於寇掠。至是海乃偕夷酋辛五郎、聚舟結黨、衆至數萬、入南畿・浙西諸路。」
- (10) 鄭舜功『日本一鑑／窮河話海』巻四／風土。「種島之地、…嘉靖壬子、徐海誘夷私市列表、比（此）寇海航而去。逮歲甲寅、徐海復誘島夷、入寇而去。歲丙辰、徐海亦復誘夷、三犯中國。誘來之夷漂流者衆、餘來授死、部落俄空。…」
- (11) 鄭舜功『日本一鑑／窮河話海』巻四／風土。
- (12) ルイス・フロイス（松田毅一・川崎桃太訳）『日本史』六（中央公論社、一九七八）七一—七二頁。
- (13) この種の観点に立つ最も包括的な研究書として、林仁川『明末清初私人海上貿易』（華東師範大學出版社、一九八七）を挙げておく。
- (14) 江南の周縁地域で活動した無頼集団は、「倭寇」以前から官府の地方統治に対する脅威と見られており、しばしば反乱の主体となった。山崎岳「江海の賊から蘇松の寇へ—ある「嘉靖倭寇前史」によせて—」（『東方学報』八一、二〇〇七）を参照。
- (15) 嘉靖倭寇の顛末を詳細に紹介した研究に、鄭樑生「明・日関係史の研究」（雄山閣、一九八五）がある。
- (16) 前掲註(7)の李論文は徐海の事蹟を主題とするものの、その嘉靖三五年の活動についてはほとんど踏み込んだ考証がなされていない。この期間については、Charles O. Hucker, "Hu Tsung-Hsien's Campaign

- against Hsu Hai, 1556”, in Frank A. Kiernan and John K. Fairbank (ed.), *Chinese Ways in Warfare*, Harvard University Press, 1974が、胡宗憲の作戦過程を詳細に跡づけ、傾聴すべき評価を下している。
- (17) 天啓『平湖縣志』圖九後葉。
- (18) 鄭若曾『籌海圖編』卷九／大捷考／乍浦之捷。
- (19) 屠珍采「記平湖人民抗倭沈莊大捷」(平湖市図書館公式ウェブサイトより <http://www.phlib.com/wanqing/index.php?id=3359>)。
- (20) 唐鶴徵『皇明輔世編』卷六／胡少保宗憲：「堂宇邃麗、垣墉高固、四角俱有望樓、可以遠瞭。」
- (21) 前掲註(1) 須田論文を参照。
- (22) 『明世宗實錄』卷四三八／嘉靖三五年八月辛亥：「我師遂薄賊營、會大風縱火(火)、諸軍鼓譟從之。海等窮迫、皆闔戶投火(火)中、相枕籍死。於是浙直倭寇悉平。」『倭變事略』卷四／附「胡總督奏捷疏」：「至二十六日辰時搜巢、徐海率領倭賊數十、持刀督戰。當被永順把總官汪浩・田有年等、就陣斬首。餘賊一時盡滅。」
- (23) 『倭變事略』卷四：「二十五日、…是日徐海為雙黨信殺。」
- (24) 鄭若曾『籌海圖編』卷九／大捷考、茅坤『茅鹿門先生文集』卷三〇：「陳東黨聞之大驚、即勒兵募兩侍女、過海所。罵曰、吾死、若俱死耳。遂私相稍而鬪。海中稍、衆大亂。明日官兵四面合牆立而進、…海窮甚、遂沈河死。」

〔附記1〕

本稿は、二〇一三年四月二日に東京大学史料編纂所の主催で行われた「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」における報告原稿に註記を補ったものである。同集会は史料編纂所特定共同研究「本所所蔵品ならびに中国国家博物館所蔵品にみる「倭寇」像の比較研究」の成果報告を目的としたものであったことから、筆者は前年度の本紀要二三号に共同研究の成果の一端として発表した「張鑑「文徵明画平倭図記」の基礎的考

証および訳注―中国国家博物館所蔵「抗倭図卷」にみる胡宗憲と徐海?―」の内容紹介に報告の半ばを割いた。本稿と前稿との間に重複する内容があるのはこのためである。なお、本稿の中国語版は『中国国家博物館館刊』二〇一三年第六期にすでに掲載されている。ただし中国語版は編集者の手違いにより本文中の注番号が一切消失していることを申し添えておく。

〔附記2〕

二〇一三年七月二三日、筆者は史料編纂所調査団に同行し、中国国家博物館で『抗倭図卷』の实物を調査する機会に恵まれた。その際、須田牧子氏の指摘により、画巻左方の凱旋する官軍の行列に、月代に剃った生首を手にする二人の兵士の姿を確認することができた。後ろ手に縛られた「倭寇」の捕虜三人のすぐ後ろに続くことから、これらを徐海らの首級と見立てることも不可能ではないだろう。ただし、『抗倭図卷』の描写を見るかぎり、二つのうちいずれの首級についても賊軍の大將首であることを明示するような画面設定はなされておらず、何らかのモチーフとしての意義を見出すことは難しい。張鑑がこれに言及していないことから、『平倭図卷』においても同様にぞんざいな描写で処理されていたに過ぎなかったと想像される。これを賊首徐海の首級と見なして画面全体を「乍浦・沈莊の役」と断定することには、依然無理があるように思われる。